

児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴

田 畑 治

I 問題と目的

心理臨床相談に来談するクライアントは、年齢もまちまちであり、その訴えや問題もかなりバラエティに富んでいる。

筆者は、ここ数年来、年齢的に中年ないし中高年層のクライアントで単独事例の相談に携わることが多くなっている。なかでも、近年の傾向として、中年婦人の相談が特に多くなってきている。かかる成人女性ないし中年女性のカウンセリングの方法論に関し、かつてその問題点のいくつかを報告したことがある(田畑; 1976, 1977)。

その後、更にかかる年代の臨床経験を深めていくなかで、最近特に目覚ましく増加している問題に、夫婦関係の問題や性的な問題がある。これらの問題は、たとえば家庭裁判所の家事調停に、あるいは専門医(産婦人科や泌尿器科等の医師)に紹介するほどの深刻さや身体的要因はかならずしも見受けられないものがある。

心理臨床の独自性や存立基盤を問うとき、われわれはこれらの中年ないし中高年層の人びとへの心理臨床相談の“場”を開拓することは、必要不可欠であると考えられる。特に、わが国のように社会が高度化し、家庭生活が物質的に充足され、合理化されていくのに伴い、女性のライフ・サイクルが変化し、女性の職場進出が目覚ましく増加していきつつある今日、これらの問題は、今後より一層増加していくことが予想される(池田, 1985)。

ところで、このような年代層および問題群の中に、幼児・児童期に、その人たちの母親を何らかの原因(たとえば病気や事故)で喪失した体験をもち、“悲哀の作業”(mourning work)を十分行わないで、ある種の心理的障害(=抑うつ症)を本人自身に引き起こし、また家族成員にも心理的問題を輻輳的に引き起こしている事例に出くわすことがままある。いわば母親モデルを喪失し、対人関係の障害をひき起こしている事例である。

米倉・成田(1983)は、母親が自殺した後に、ヒステリー性の身体症状を呈した小学5年男児の心理治療例を

報告した。そして母親喪失によって起こる“否認”、“依存対象の喪失”、“罪悪感”、“見捨てられたことへの怒り・腹立ち”、その後における“自己受容”の過程の心理学的意味を考察している。また田畑(1984a)は、幼少期に母親が罹病、または幼児自身が疎開させられることによって生じた“母性はなく奪体験”ないし“母性喪失体験”をもち、“見捨てられた不安”を根底的に払拭しきれないまま、結婚し、中年を迎えた男性および女性のクライアントの夢分析を行った。これらの事例でも、夢分析の過程で、“対象喪失”(小此木, 1979)および“悲哀の作業”が主要なテーマになった。

上記のような心理学的過程およびテーマを十分に体験し、克服することは、今後ますます何らかの理由で増加するであろう母親喪失に対しての、予防精神衛生の観点からも、注目されていかなければならないと思われる。

本研究では、以上のような問題意識のもとで、筆者が自験した2事例のカウンセリングの特徴を報告し、若干の考察をすることが目的である。特に事例Aでは、治療面接の過程でクライアントが報告した夢、とりわけネコ(動物)の夢の心理的意味についても触れ、また事例Bでは、治療面接の中に採り入れた“フォーカシング”(Focusing)の効果についても言及しようとする。

なお、各事例の治療面接の構造をあらかじめ記述しておく、治療面接は原則として週一回、一回の面接時間は45分(または50分)で、対面法で行われた。治療的態度は、受容的非断定的態度を基本として、夢分析ないしフォーカシング技法を適用した。治療面接の費用は、無料であった。

II 事 例

事 例 A

1. 事例の概要

E. M. 女性 来談時39歳2カ月。既婚。専業主婦。本学学部卒業生がE. M. 宅の子どもの家庭教師に行き実情をきき、紹介してくる。

1) 主 訴

「神経の疲れからくる不眠を治したい」という訴えであった。

2) 家族構成

4人家族である。夫(41歳)は大学卒で銀行課長である。本人(39歳)は高校卒である。娘は、中学3年と中学1年の2人である。

3) 問題の発生と経過

来談する5カ月位前から寝ていて天井がまわるような感じになった。このときは近所の医院からの往診で治った。またその1カ月後、今度は下痢が続き、食欲が減退し、体重も3、4Kg減った。近所の医院で再び受診するが、「異常なし」といわれた。来談時1カ月前位から不眠が始まる。朝方3時半から4時くらいまで眠れない。昼間でもイライラする。そして何かにつけて心配、不安、劣等感が生じる。このところ無気力で、何もできないでいる。対人関係が煩わしく、同じ棟内に住む夫の上司(店長)夫人や親せきに、恩恵を施されるのが負担に感じられる。夫には「背伸びしている」「ふつうの奥さんとして付き合えばよい」といわれるが、それができない。なお、本人は来談時の一週間前に、某大学病院(内科)を受診し、医師に「何がイライラさせるのか、わかるとよい」といわれたという。一週間一回通院中であった。その後、胸部レントゲン検査、肝臓検査等を受けるが、どこにも「異常なし」といわれている。

4) 本人の生活史の概要

小学1年時に終戦の年を迎えた。その頃、本人の母親は過労から肋膜炎を患い、死亡する。母親の死亡後は、祖母に育てられ、よく甘えられた。本人が小学6年時に、父親が後妻(継母)を迎えた。この継母には甘えを抑えてきた。そして継母には、何かをやるよう指摘される前に、家事などしなきゃいけないと思い、やっていた。本人が結婚する時、祖母はまだ生存していたが、継母とはあたりさわりのない付き合いをしていた。

なお本人は長女であり、下に弟3人(しかも末弟は母ちがいの弟)が居り、何かにつけて“姉”の役割をとらされていたことが推察される。

5) 来談時における総合所見と援助目標

本人は現在家のこと(新築した家の借金の返済、子どもの教育、年老いた両親のこと、ピアノ塾)や現住所での対人関係で、煩わしさや負担を感じ、押しつぶされそうになって、不眠症や下痢などの症状を形成している。性格的にも、内向的傾向が強く、対人関係にも気遣いをし、消極的である。

これには、初回受理面接で本人が明らかにしているように、児童前期(小学1年時)に、母親を失い、甘えの

対象は専ら祖母であって、その祖母も本人の結婚後に亡くなり、ほんとうに依存でき、親密感を感じうる対象を喪失してきていることが基因していることが伺える。また父親は、本人が小学6年時に後妻を迎えたが、本人はその継母には甘えを抑制してきている。本人は継母には何かをいわれる前に、自分からしなきゃいけないと台所仕末やそうじをやっていた。継母は、兄弟分け隔てなく育ててくれたが、やはり心底から馴染めなかった。

援助目標としては、本人自身の内的な生活史を探究するなかで、同性の親密な相手を再発見し、支え合う力を発揮していくことである。本人が表明した初回夢(「昔の友人、昔お付き合いした人」)は、重要な手がかりになると予想された。

2. 治療過程

カウンセリングは、某年8月10日(初回受理面接)から、翌年7月5日(#28)まで行われた。このクライアントは、わりに前半よく夢を話題にし、後半は自由な話題を表明していった。以下に、心理治療過程を、I~IV期に区分して記述する。

I 期：自己紹介

この時期は、“自分にかかわる重要で切実な問題”を語り、自分の実情をカウンセラーにも伝達し、共有してもらった時期である。不眠の問題に関連して、偶然夢をみる可能性があること、夢の中に“ネコ”が登場することを語り、カウンセラーもそれに注目をしていた。この時期は、#1(8月10日)から、#7(10月7日)までである。

主訴となった問題の経過、現居住地での生活状況、対人関係状況を伺うなかで、一週間前、熱帯夜で眠れなかった、と語り、カウンセラーが「夢なんかどう?」と尋ねたことをきっかけに話が続いていく。「眠れないとき(夢は)みない。しかし「変な昔の夢をみている」との表明がなされる。

夢①「昔の友人が現れてくる。昔お付き合いしていた人の夢」(#1) — 《〈気持は?〉どうしてあんな昔の人のことをよく見るのかなあーと自分でも不思議に思うことがある。》 《 》内はクライアントの表明。

夢②「子ども(=娘)が傍に寝ている夢」(#3) — 《主人が旅行中、下の娘に頼んで一緒に寝てもらおうことにしていた。夢はどんなときみるのだろうか。目を覚ましてみたら、子どもはまだ起きていた。子どもには、母親としての自分が怠けぐせをつけてしまっで見習わせているみたい。でも子どもは可哀想なくらい自分に気を遣ってくれる。》

夢③「白色の大きいネコが“花柄模様入り”の紋をつけている。それが学校のような公衆トイレがずらり

と並んでいるところにしゃがんでいたり、こちらを向いている。自分は怖くて逃げ出す。ネコが三毛ネコではないので変だ」(#4) —《<どうしてそんなのみたのでしょうか?>自分はネコがひっかいたり、足もとに寄ってきて気持ちわるいからだと思う。主人の里(中国地方のある市)にいくと飼っている。ネコがそばに尻尾を上げてすり寄ってくるが払いのけられないで、じっと辛棒しているのが実状である。主人に夢のことを話すと「そんな模様のネコ、おもしろいな。可愛がってやれ!」という。また主人には「感謝すること10くらい言ってみろ」といわれるが、5くらいしか浮かばない。主人にも、医師にもゆっくり話を聞いてもらえない。》

夢④「近所の銀行員の奥さん2, 3人がパンを焼こうと寄ってくる。自分はもう一つ気乗りしないでいる。」(#4) —《<その奥さんたちと普段はどうか?>例の支店長夫人は居ないが、別の奥さんもいる。名前のわからない人も。やはり心の奥底では、近づきたいのかと思うが、もう一つピッタリでない。》

この前病院の医師に夢の話をしたら、「夢を見るのは眠っている証拠だ」「気持ち悪い夢は見ないに越したことはない」といわれた。主人は、自分(妻)の病気をきっかけに、禅の本、TVの『宗教の時間』の視聴に誘う。しかしもう一つ乗り気になれなく、「おまえは頑固だから」といい、主人の会社の人で人生の曲り角にきて、その人も性格的に「頑固で」、ノイローゼになった話をしてくれた。(# 5)

またネコの夢をみた。夢⑤「子猫が4, 5匹、自分にまつわりつきそうになった。あまり色は覚えていない。はっきりとしていなかった。「気持ちわるい」と思っているところへ、子ども(=娘)がそばに来て自分に声をかけたところで目醒める」(#6) —《朝起きて、家族のものみんなと話していた。子どもや主人に、「そんなに怖がることないのに」と慰められた。》

夢⑥「わりあい身近かな人の夢。かの支店長夫人と買い物に行く夢」(#7) —《笑いながらの夢の表明。<夢の中の感じは?>やっぱりそんなイヤな感じではなく、話の内容は柔かい感じ。でもやっぱり朝起きてみると、疲れたような感じ。この前、デパートに展覧会を一緒に見に行った。帰って疲れた。やはり一対一の関係だと、自分の方から話さないといけないという思いがある。3人居ればもっと楽だ。》

7回目の終りぎわに、先生(カウンセラー)には何でも話せる、甘えられると語っていた。自分は困地では「よい奥様でありたい」ということを絶えず気にしていると語っていた。

Ⅱ期：楽になった自分・“喪”の作業

この時期は、自分の身边に生じた体験を語っていく

なかで、気分的に楽になったことを表明している。話に余裕やくつろぎの感じが伺えるようになる。また自分の生いたちを語り、母親との死別の風景を想起し、夢を通して再び内奥のさまを開示していく。現実にも、娘のスヌーピーを抱いて寝ているということも判る時期である。この時期は#8(10月19日)から#15(12月21日)までである。

このところ2週間のあいだ気分はだんだん楽になり、自然にふるまえるようになった感じ。名古屋祭のときもうまくやれて満足している。春頃「胃の神経症」になったときは、ものも言えない深刻な気持ちになって、子どもや母(義母)にも慰められた頃からすると、ずっと楽になった。(# 8)

ひとりでも、以前のようなことない。自分の場合小学1年のとき実母を亡くし、小学6年まで専らお祖母ちゃんに育てられた。結婚前まで、祖母と寝ていた。父が再婚したとき、継母との間には祖母が出てくれていて、しっかり守ってくれた。継母はやり手で、お茶、お花、洋裁など一切やれる人である。(# 9)

このところ40歳という年齢が、一つの飛躍の年頃であるということを、過去の頃と比べてしみじみ感じている。自分には、以前関東のY市にいたときの「サークルのような活動」が欠けていた。このサークルは質素な地味な会であった。これに反し、名古屋にきて、支店長夫人の派手で高価な買い物に出くわし、戸惑い、だんだん重荷になってきて、煩わしくなっていた。(# 10)

春頃、自分が不安定であった頃、上の娘の受験に際して感じていた気持ち、この頃の自分の気持ちには相当のちがいがあつた。病院の受診も2週間に一回になり、一回の診察も10分で終るようになった。医師に「カウンセリングを受けている」と話すと、認めてくれ、「しっかり聴いてもらうように」と励まされた。支店長夫人がカゼをひき、背中を痛め、この二日間食事を届けてあげた。自分なりに手作りの食事を恥しがらずに持参すると、支店長夫人も喜んでくれた。主人が2日間出張で出たが、無事にすごせた。以前春頃は、2日間を1日の出張に短かくしてもらっていたくらいである。イライラもしなかった。自分の場合、依存的で他人に甘えたい性格がある。(# 11, 12)

病院の医師に受診し、「先生(タバタ)のことを知っているから、そういう話し合いがあなたの場合重要である。しっかり続けるように。」「病院では十分時間がなく、先生のところで話していくのが一番いい」といわれた。

夢⑦「土曜→日曜にかけての夢。自分が寝ていると

ころに来て、首すじや顔のあたりをまつわりつく。日曜→月曜にかけての夢。ネコがどうしていたのか、はっきりと覚えてはいないが、とにかくネコの夢だった。

(#13)→《またうなされていたらしい。主人に「虎歳生まれのおまえが、ネコにおののいたりして。ネズミ歳生まれの自分(夫)の方にネコはくればよいのに」といった。子どもには、あきれられている。上の子には、スヌーピーの縫いぐるみを借りて寝る。＜ネコから来る連想は?＞主人の里に行き、親子のネコがいて尻尾を上げて魚をねだりにすりついてくることがあった。＜ネコのイメージは＞肌ざわりがフワフワしている。小学1年のときの母親の死の追想。母親の茶毘の煙をかすかに覚えている。当時父親は、戦地にかり出される寸前だった。父親は虫の知らせでかけつけたが、母親はすでにこと切れていた。》

夢⑧「他人に促がされて、“嫌だ”といっている自分」(#14)→《この前、木曜の夕方、家について急に心臓が動悸をうった。手足が冷えておかしくなって、ひき込まれてしまう感じの不安を感じた。この夢のとき、ちょうど家の上の娘がいて助かった。近所の医院に行って診てもらった。やはり自分のこと考えていると、つぎつぎに新しい事態が起り、胸さわぎを覚えたのではないか。今度主人が関東の奥山にゴルフで出張するので不安になったのかかもしれない。》

主人の出張中、一応無事につとめられた。ゴルフで主人は優勝した。主人が出張前、自分は「うなされているようだ」といわれた。主人に「済まない、済まない」とうわごとをいっていた由である。＜うなされる以外に夢はみないか＞その後、夢はみない。ただ病院に行く途中、T公園のところに、以前の夢(=夢③)に出てきたような黒い大きいネコが枯木に1mくらい駆け上ったのを見た。自分は怖くて急いで病院の方に行った。夜、休むときに娘のスヌーピーをまだ使っている。よく休める。(#15)

Ⅲ期：昔の友人との再会。自己統合に向けて

この時期は、クライアントが新しい年を迎え、年末、年始にかけての生活の様子を語り、疲れすぎないように、暇を作らないよう、ほどほどのすごし方をしたことを伝える。また相変わらず夢を語り、心の内奥からのメッセージを共に考えていく時期である。そして、これらの作業を通して、昔の友人と再会し、心底から転居を実現し、自己統合に向っていくようになる時期である。この時期は、#16(翌年1月18日)から#21(3月22日)までである。

夢⑨「自分が主人に“反省している”旨のことをうわごとでいっていたとかの夢」(#16)→《正月早々に見た夢。主人にいろいろ迷惑をかけ、主人に負い目があるのかと思う。この夢は、娘に指摘されて気がついたら、夢だったことがわかった。娘には自分の状態を回復するよう励まされつつ、他方では気になることをいわれて強く反発したりできない自分を表明する。＜夢を語るクライアントは、やはり自分に自信なく、うなされてしまう夢で、ビクビクしている様子が伺える。＞》

夢⑩「《関東の》C市にいたときの二軒長屋の住宅が10棟くらいある。そのところに住むようになったとき、一番奥に住んでいた。その一番奥に通じる道の両側は竹ヤブのようになっていて、身の丈以上もある竹が生えていた。その家からせっせと家財道具を仕末して引っ越しをしようとしている」(#17)→《かつて住

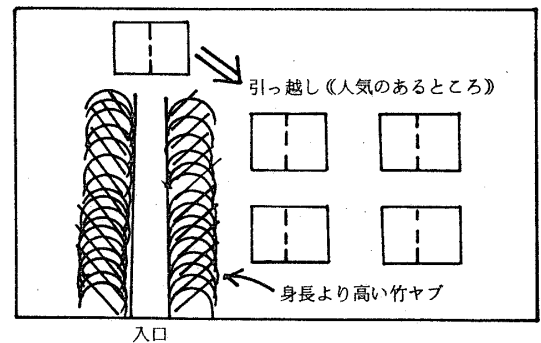


図1 夢⑩の視覚化した図

んでいたところだし、その住宅に住むようになったとき、竹が沢山生えていて刈り取るのに苦労した。その竹ヤブはどういうことか。春先には、ポストに女性の下着が放り込まれていたことがあるとか。一寸奥まったところだから、無気味なところはみられた。近所に引っ越さないかといわれたことはある。また主人の転勤が丁度2年前の2月頃であり、子どもの進学のこともあり心配している面もあろう。以前みたネコの夢はみない。でも黒ネコが道を歩いているのは気持ち悪い。》

夢⑪「早くお悔みの手紙を書かないといけないと思っている自分の夢」(#17)→《名古屋の社宅に住んでいた人の奥様の親が正月明けに、東京で亡くなった。主人にこの夢のことを話すと、「そんなに気になっているのだから、早く書いてあげればよい」と言われた。＜自然な気持の夢だと思うが…＞自分もそう思う。》

病院に行き、医師から投薬も減らされ、快方に向っていることを嬉しく思う。支店長夫人とも“自然に”お付き合いができる感じ。でも朝出勤前、主人が支店長より先に家を出るように、主人に口出ししてしまう。主人には、「遅刻したり、迷惑かけなければよい」とたしなめられる。主人は自分を口やかましい妻とみている。(#18)。

長女の高校受験のための“3者会談”がこれからある。娘は○群を希望しているが、親としてはもう少し安全な道を踏ませたい。3学期に少し成績も下ったことだし。(#19)。

長女は私立S高に受かった。ここに受かったのも、公立は△群にしておけばよかったと悔んでいる。3者会談で□群にしたなら、ブスーとしていた。病院に主人が付き添って挨拶に行ってくれた。医師には“薬物依存”をしないよう注意された。ていねいで親切な応待に気に入っている。相談室にもいつまでも頼れないが、いますぐ来なくなるのも不安である。(＃20)

長女はK高(□群)に受かった。あれだけ文句いっていたのに、受かったら文句いわなくなった。男子2名とともに合格した。「子どもっておもしろいですね」。(＃21)。

Ⅳ期：終結に向けての依存-独立の葛藤、そして終結

この時期は、カウンセリングの終結に向けてのクライアントの心がまえをつくっていく時期である。＃22(4月12日)から＃28(7月5日)までである。

今回(＃22)で面接を終結にする予定でいたところ、かの支店長宅が転勤となり、自分は急にさびしくなった。荷物輸送トラックが出発したら、急に泣けてきた。「あんないい人が行ってしまった」と悲しんでいたら、娘たちに笑われた。こんどの支店長は主人の直接の上司に当る人で「気楽な人だ」といっている主人。奥様は、近所の人のウワサでは、相当の教育ママらしい。夢はその後みなくなった。(＃22)〈面接は今しばらく続行を約束〉

新支店長夫人との交際がうまくやれるかを心配する。相手への余分の配慮をし、不安になりかけているクライアントは夫にもなだめられている。〈カウンセラーは、クライアントがもっと他人への不満や攻撃感情が表出され、自分自身の内面感情を明確にできないかを望む。〉(＃23)

新支店長夫人は、ハッキリした人で、こちらは肩が凝らない感じであることがわかってきた。《前支店長夫人は着飾って、肩が凝っていた。》自分の性格について、やはり自分の気の持ちよう、長所にも短所にもなることがわかってきた。自分は人を頼りにするところがある。それもほどほどでよいと思う。ここ《相談室》にはまだ来たい気もする。〈もう一人でやってみてもらえるのではない。一週間おきにしてみよう。〉(＃24)

昨今の頃と比べてみると、転宅して落ちつくまで一心だったが、落ちついてホッとした途端に、急にイライラし、不安感におそわれるようになっていた。でも今はそのようなことはない。ただときどきうわごとをいっているらしい。転勤のとき「一緒に連れていって」と言っているらしく、主人に隣りでつき起こされる。(＃25)。

今朝、主人と何とはなしに話していたこと——自分たちは名古屋に気負って転勤してきた。しかも銀行マンば

かりの社宅で、課長よりも身分の上の人ばかりで、へまをやらないように、と身構えていた。他人を大切にしようとかえってきゅうくつになり重荷になっていた。自分自身も、それで‘サークル活動’もやめていた。〈いまは身分に拘わらず、自由にやってよいのではないか?〉そういう心境である。主人自身も、出身校がちがいが、「一流大出身者にヒケをとらないように」「失敗しないように」と神経がピリピリしていた。(＃26)

病院での受診時間が短くなり、自分は良くなったのだな、と思うようになった。病院の若手の医師にも自分は気がまわるようになり、それだけゆとりが出たのかと思う。主人と「(カウンセラーの)先生は、私よりお若いと思うのに、自分の生い立ちなどからよく話せたと思う」といっている。《しみじみと振り返りつつ》(＃27)

今日で終りとなると、さびしい気持がする。でも前回よりすっきりしている。学内の夾竹桃の色も一きわ美しく、印象深い。病院には2週間おきに通っている。医師に「カウンセリングは定期的には終り」と伝え、医師は「そのようになったのは、先生のおかげです。私からもよろしくと伝えてくれるように」と仰言っていた。病院にはお薬もらいに行くのが楽しみである。〈今回の事態でMさんなりにつかめたことは何か?〉何でもざくばらんに他愛のないことを話せたことがとてもよかった。「～してきてください」といった宿題もなく、肩が凝らなかった。何でも話せたことで、とても気持ちが落ちつき、自分のことが色々考えられた。母がちがうこと、祖母のもとと継母のもとで、自分がへまをやらないよう気張っていた。自分が娘をもって、あー母と娘というのはこんなものかと思うようになった。娘が弁当がらを帰宅しても放っている。自分はお利巧さんでスキがなかった。住宅でも気を張り、肩を張っていた。それが逆に劣等感に陥る結果になっていた。いまは失敗しても、それでいいんだと思うようになった。(＃28)

事例 B

1. 事例の概要

K. M. 女性 来談時38歳7カ月。既婚。デパート店員。某新聞記事“キャンパス東海”での相談室紹介をみて来談した。

1) 主訴

「人と話すのが億劫で、気持ちがうつ状態である。生きるってこといいなァーという感じがしない。」

2) 家族構成

4人家族である。夫(46歳)は高校卒で石油会社勤務である。“ごく普通の人”で、夜勤め帰りは遅く、営業関係で付き合いが多く、酒もかなりいける方である。本

人(38歳)は、高校卒で、6年前よりあるデパートの店員である。夫の転勤で、たびたび転居し、あまり友だちらしい人はいない。夫とも休日がズレて、頼りにしていない。内向的で、独居を好む性格である。子どもは高校2年(16歳)と中学3年(15歳)の2人、いずれも男子である。

3) 問題の発生と経過

来談する1, 2年くらい前から、特に人と話すのが苦痛で、話すことがなくて済むのなら済ませたい。うっとうしい気分になっている。“生きているっていいな”という実感が欲しい。睡眠は夜中に目が醒めるので3時間くらいしかとれない。だから日中は、身体がだるい。たまには一睡もしないときがある。夢は最近みない。気分的にあまり重いので、運動しようと思うが運動意欲が湧かない。いまは体力もない。〈受診歴は?〉1年前の春か秋に某病院を受診した。女医に「自分で躁うつと決め込んでいるのではないか」といわれた。投薬2, 3種を一週間分もらったが、飲んででも著効はなく、変りばえしなかった。〈他院の受診はどうか?〉行こうと思っても行けていない。

4) 本人の生活史の概要

小学入学前まで、わりと母親の乳房にさわっていたような記憶がある。4人兄弟の末っ子であったし、おねだりした記憶もある。

小学6年の時に、母親(当時42歳)を突然、交通事故で失う。当時入院中の父親(黄胆疾患)を、母親が見舞いに行く途中での事故であった。それまでの母親は、元気でピンピンしていた。自分は、母親の死後、“済まなかったな”という気持がある。それ以降何かにつけて、自分は過敏になったように思う。

小・中・高校時代を通じて、全体にフツと空しい、物足りないという感じになっていた。そしていつの間にか大人になったという気がする。そういう気持になっても、いつの間にか当り前になった感じになる。“生きているっていいな”という感じがしない。〈高校時代の交友関係は?〉いたし、おしゃべりはしていた。しかし本音でしゃべることはなかった。

高校卒業後、ある保険会社に勤めていた。1年目は仕事に興味があった。2年目からは面白くなかった。2年6カ月目に結婚を契機にやめた。結婚は、姉の嫁ぎ先の母親の友だちの息子さん(現夫)と“見合い結婚”をした。当時は、そんなに夫婦関係は悪くなかった。わりと自分をさらけ出せるという感じで、気楽な生活であった。

5) 来談時における総合所見と援助目標

本人は、兄姉3人の下に末っ子として生まれ、幼少時

から母親を頼りに生きてきていた。四国の緑に囲まれた環境で高校卒業し、会社勤めを2年半行い、現夫と“見合い結婚”をしてきている。夫の転勤で、今日まで4回転居をしてきている。その土地々々では、あまり親密な付き合いもなく、本人自身も人付き合いは好む方ではなく、どちらかというと孤独を好む方である。自己抑制心も強い。

もともと依存的傾向の強い性格で、内向的である上に本人にとって重要な人物である母親を、小学6年の時に突然の交通事故で喪失している。本人は、その頃から、性格的に過敏になり、他人との関係で依存感や信頼感をもたないよう、強く自己抑制してきているように伺える。

“うつ状態”は、母親を喪失した小学時代から、すでに存在していたと考えられる。病前性格も、内向的で、過敏であるし、生き甲斐喪失状態は、その性格の上に形成されてきている。“ひとりで辛棒し、人に頼らないで生きること”に徹してきている。

援助目標としては、このような本人にとって、今日までの対人関係、とりわけ母親を突然に喪失してからの対人関係がどのようなであったかを、深く探究していく心理療法が望まれよう。心理療法では、“フォーカシング”(Gendlin, 1978, 1981)も用い、感情一体験過程に触れながら、対人関係の探究をも行うことにした。

2. 治療過程

心理療法は、某年6月4日(＃1)から翌年6月10日(＃28)まで行われた。そのあと、3か月経って9月16日に、フォローアップ面接が行われた。このクライアントは、思考と感情過程とを切り離し、強く自己抑制していることも伺われ、フォーカシングを適宜織り込みながら、治療面接を続けていった。したがって、本事例ではフォーカシングを適用した回も詳述しながら、以下に経過を述べる。全体はⅠ～Ⅶ期に区分した。

Ⅰ期：自分の問題表明——うっとうしい気分

この時期は、自分の問題、特に気分のうっとうしさを表明する時期である。＃1(6月4日)および＃2(6月11日)とである。『』—その回の一言表現

主訴にまつわる状況を語り、生活歴、転居歴、家族関係を語る。その過程で、自分が小学6年の時に、母親が交通事故で死亡した話、自分自身のここ1, 2年の病状と受診歴を話していく。〈いま、ここではどうか?〉必要なことは話している。多少緊張しているみたい。自分が一番気持が楽なのは、ボケーツとして、本読んだり、セミ・クラシックの音楽を聴いたりしているとき。『気分がうっとうしいのです』(＃1)

『人に頼らないと納まらない自分』＜どうですか、その後の気持は？＞あまり変りない。人を頼らないと納まらない自分。自分が自分を管理できないことは情けない。デパートに出勤する日はうっとおしい。今日は最近になく気持が軽く、珍しい。大学構内の緑が多くていいなあと思った。育ちが四国で山が見えないと不安であった。＜山というイメージは？＞色んな草花、野鳥がいて、気持が大らかになる。主人と自分は休みの日がちがうので一緒に行けない。

Focusing # 1 : 「散り散りになっている」→「空に浮んだ雲」→「白い玉のようになって、清流の中を流れている」→「どうしてそうなのかわからないが、気持が（ここで）楽になったのは確かだ」《表情に紅がさし、顔全体の血色がよくなり、ポォーとした感じになるクライアント。》（# 2）

Ⅱ期：自立すること・理想を追い求める

この時期は、面接に通うことが楽しみなふうで、毎回定期的に通って来るようになり、自分の理想としていることを語っていく。# 3（6月18日）から# 10（10月2日）にかけての時期である。

『精神的に自立しなきゃあいかん』＜どうぞどういうところからでもご自由に…＞はじめ沈黙が続くが、“アレルギー性鼻炎”で、ハナ詰り、カユカユ、まぶたの中がむずがゆくなる。去年の春、初めてでた。お薬飲むと納っている。＜ご主人はあなたの気分のこと知っているか＞「そのうちいいことあるわ」といってまともにとり上げてくれない。単なる“甘え”としか受けとめてくれない。だから自分も最近はいわないことに決めている。＜支えがほしいことないか＞誰でも母が突然死んだように、死が訪れるのだから、他人に依存しては行けない。ひとりで生きなければならない。＜逆にそう思うことで人を頼りにしなくなっていないか＞そうだ。できる範囲のことは自分でやる。子どもに言ってもやらないと自分でやっている。

Focusing # 2 : 「①子どもの頃の川で泳いだり、山から滑り降りていたこと。②高松の家の花畑、③デパートの売場」＜一つを選んでみましょう＞→③を選択。「おそうじをしていて、すっきりしている感じ」＜一つのことばであらわしてみてください＞→「整頓」＜あなたの感じにピッタリかどうか確かめてください＞→大体よく似ている。ピッタリだ。＜感じられたものが変わっていくかみつめてみてください＞「ことばの意味にとらわれて、うまくいかない感じだ。」＜ここまでで打ち切りましょう。今、どんな感じですか＞比較的快乐な感じである。（# 3）

『自然の摂理で自分らしい生き方が理想だ』＜いまの気持でどうぞ…＞自分がおかしくなったところは、子育ての過程で、親の真の愛情が自分に欠落しているのでは

ないかという感じが、いまでもある。それを考えていて自分はおかしくなった。“自然の摂理”のようなものがあるのではないかと思うが、それがつかめなくてもどかしい。読書でも、東山魁夷、神谷美恵子、畑正憲、田辺聖子らのエッセイ、渡部純一のものがおもしろい。命令すること、されること嫌い。自分が“自分らしい生き方”をしたい。女の人にはベタベタ甘えが強い。＜あなたは赤ん坊が母親に甘えるように、それをしないで抑制し、自責の念にかられていないか＞自分は“末っ子”で甘たれて、依存的な生き方をしてきたために、ほんとうに自分が生かしきれなかったという気がする。人をあてにしてはいけないと思う。自分の実感をもてることが先決である。（# 4）

『ひとり立ちしていくこと vs. 気ままでありたい』前回あれから考えて、自分が精神的にも、経済的にも、“ひとり立ちしていくこと”を頭で考えていて、実際の本音は、“気ままでありたい”ということがあるという矛盾に気がついてきた。いまほんとうにやりたいことは、いま家事や仕事をやめて、寝ていたい。子どもにせがまれて食事を作っている。その時、その時のやりたい気持でやること、瞬間々々できたらいいなあと思う。“甘え”で生きていこうとするとうっとおしがられる。社会がどんなにひっくり返っても、自分自身自活していることが一番と思う。「子どもの頃の努力不足がたたります。」自分自身を生かしきっている人——日本画家小倉ゆきは清らかで理想的な女性だ。（# 5）

『自分には人間的魅力がない』一寸落ちついたかなという気持が一寸出ると、また重くなる。知った人と会うと気が重くなる。家でひとりしていると気が楽になる。勤めに出るとえらくなる。夜中目醒めることがあって、主人に言う主人が寝れなくなるので、黙っている。＜主人にもう少しいたわってほしいと思わないか＞そうだ。夫婦だから甘えることはあるが、うっとおしがる。また人に話したからといって気が楽になるわけではない。身近かに感じる人があれば近づきたいが、自分自身に人間的魅力がないから。＜井戸端会議なんかどうか＞煩しい。黙っておれば黙っていたい。

Focusing # 3 : ＜井戸端会議に居合わせている＞→「うっとおしくて帰りたい感じ。＜全体の感じは？＞「何か白いフワフワした感じが見えている」→プラスチックの形をした空の雲のかたちをしている」→＜一つのことばを浮かべてみて下さい＞→「澄んだ空気」→＜ピッタリかどうかチェックをしてみてください＞→多少ちがう。少々曇っている。動かない。（# 6）

『無心に生きられる人になりたい』今までの自分は“自分をもっていない”という意識が強かった。そうい

う観念にとらわれていた。それで、まわりの人にも思いやりをなくしていた。瀬戸内寂聴（晴美）さんは、遅いと感じた。＜自分が一番重荷になるときはどんな時か？＞自分を問いつめ、これでいいのだろうかと思い、ほんとうの自分を生きていないと感じ、焦ってくる。＜いまこころではどうか？＞イライラしたり焦りを感じないでいられる。ただ自分が先生（＝カウンセラー）を頼ってではなくてはならないことで、コンプレックスを感じる。自分自身が“無心”になれることを求めたい。瀬戸内寂聴さんは、才能もあり、ひとりで生きることとしごととがマッチしている。

Focusing # 4 : <全体の身体の感じ>→「幅が広く分厚い板」<木の色は？>→「肌色をしている」→<ひとつのこたばを浮べてみる>→「自然」→<チェック>→「一致している」→<シフトが起るか>→「先ほどの同じ感じの板。変る板だから変る要素はあるが、いまは変らない」→<色はどうなった？>→「同じイメージ、茶色」。<いまの感じは？>「比較的平静な状態であるが、やはり雨に濡れたところが気持ちいい。」（# 7）

『職場上司のゴマすり、二枚舌への怒り』「主人が入院しているんです」。痛風が出て、立ち上れず救急車で入院した。年1回出るが、今度のはそれだけではないらしい。結婚して初めて入院した主人。医者に栄養とりすぎといわれた。職場は、1週間休暇をもらっている。自分は気が重くて、99%精神的なものだという気がする。自分は気が弱い反面、勝気なものだから、我慢している。＜どういうところで一番それを感じるか>うっとおしい上司にいらまされると、敏感に感じ、すごくプライドを傷つけられた感じになる。＜悲しくなる>悲しいというより腹が立ってきて…！《目をまっ赤にして、絶句》上司でゴマをする二枚舌の人間は許せない。それにとり入っている部下が気になる。（# 8）

『自閉症の子どもみたいな自分』<ご主人のその後の様子はいかが？>今日夕方退院できるが食事療法をしなくてはいけない。主人はたいてい夜中12時すぎに帰宅する。自分は寝ていても寝入れない。主人は鍵を失くすから自分でもっていない。人間は自分の体調にも、自分でコントロールしなくてはいけない。主人が入院しても、自分で自分を気にし、うっとおしいなあと思うことがある。口を利くのも退儀である。だから他人には生意気だとみられる。あまり自分自身を問いつめると、自分自身の感覚がない、感情が流れていない、感情がマヒしているようなときがあり、ちょうど“自閉症”の子どものような感じになる。がんじがらめになっている。今一番心を占めているのは、自分の感情が生きることつまらないな—ということ。“夕暮れどき”が一番好きなときで、一日中では午前がうっとおしい。<生理のと

きとの関係はあるか>ある。生理の前ものすごく腹が立つ。初潮のとき母はすでに居なく、姉が用意してくれた。隠すこと恥しかった。（# 9）

『対夫への怒り爆発；息子（長男）の登校拒否』長男が修学旅行後、カゼ気味だと言って高校を休んでいる。1年のとき担任に登校拒否傾向があるといわれ、教育センターに相談を勧められ、自分だけで2、3度通った。主人は「あいつはダメだ。行かない。もう4年になる」と頭から決めつけている。自分にも「ババアになった」「変な女にひっかかった」と本気でいう。夫婦関係の危機に何度か陥り、自分が我慢するしかない。自分は片親（＝母親）を亡くしているし、ひとりで2人の子どもを養っていく自信がない。主人の行動・言動に尊敬できない、信頼できない感じでムカつく。日方に咲いた花は立派、日蔭に咲いている花はみじめったらしい。でも咲かないよりいい、としみじみ語る。

Ⅲ期：諦めるという気づき・“自然のままに生きる”ということの模索

この時期は、クライアントが自分というものを更に探究し、“本来の自分”をまさぐりはじめる時期である。これまでのように、理想主義に走らず、抑制主義に陥らず、自分のものに静かに目を向け始めるようになる。# 11（10月8日）から# 14（11月19日）までである。

『感動は向うからくるもの』無理をしないでいい、諦めるということを感じはじめた。“変な喻え”——ゴムは引っ張っても変らないのに、一所懸命いくら引っ張っても変らないことに気がついてきた。（# 11）

『当り前に生きるということ』自分はことばにするとかえって真実からズレるみたい。“当り前に生きることがいいんだナ”と思ったときは楽でいいが、意識しすぎると難しいということが判ってきた。自分の問題は長いこと積み上げになっており、しょうがない。迷いながら生きるより仕方がないんだなあ、としみじみ思う。（# 12）

『あるがままにある』これまで夫に対する“悪感情”を変えよう、変えようとしていたが、“自然の成り行きに任すより他ないな”と思いはじめた。自分の意志ではどうにもならないものだと感じはじめた。子どもに対しても、“良い親”であろうとの、心のとらわれがあった。“ありのまま”である他ない。（# 13）

『“頼ってはいけない”コンプレックス』《箱庭療法のセットを見て》このようなもので自分の気持ちが変わっていくということが不思議だ《沈黙15分》<いまどんな気持ちしている？>いまどうしても話さないといけないという気持はない。今日、これまで話したことを振り返り

つつ来室した。自分には人に頼るということに抵抗がある。＜人に頼ってはいけないのかしら＞人に頼ってはいけないというコンプレックスがある。精神的に自立していないという自分へのコンプレックスがある。他の主婦がやるように貯っているのを吐き出して、スーッとすることはない。デパートの店員に対してもそうだ。（＃14）

Ⅳ期：母親なるものの探究

この時期は、長男の登校拒否、無感覚・感覚マヒしている自分を表明し、さらに人を批判するのを自分が嫌っていたのは、自分の母が嫁・姑関係で苦しんでいても“忍”の一字に耐えていたことを語り、さらに夫方への不信感を表明していき、クライアントはより“生”の感情を吐露していくようになる。この時期は、＃15（翌年2月4日）から＃20（3月25日）までである。

『長男の登校拒否』長男がまた登校していない。“休学届”を出さないといけない。本人は「もう一度2年をやり直す」といっている。N大精神科にも連れていったが、一回きりである。中学1年時に、新聞配達をさせたが、本人はゴリゴリにやせて可哀想になり、止めさせた。（＃15）

『無感動の自分』長男は相変わらず不登校で、昼前に起きてきて、ゴソゴソしている。目下“長期欠席扱い”中である。自分は、可哀想に、という気持ち以上に自分の気持ちが沈んでいて、気持ちが動かず憂うつである。子どもが産まれたとき、自分は「この子たちに愛情を注いでやるだろうか」と自問したとき、“空しい”気がした。ここ10年、ずうっと驚くことができなく、苦しい度を越え、無感覚である。（＃16）

『自分は部屋の中のハエ、回転ドラムの中の甘日ネズミ』息子を相談に誘ったが「行く」といわなかった。治そうという意欲がないみたいだ。やはり母親としての自分がしっかりしてやれないと思うと…『目を赤らめて』。自分の中のコンプレックスは、自分が確立していないということ。＜どんなイメージか＞ピタリとこない。ガラスの一室にハエが飛びまわっていて、ちっとも外に出られない。あるいは甘日ネズミが回転ぐるまの中を廻っている感じ。こげば遭ぐほど前に進めない感じ。＜日照りの花と日蔭の花の喩えは…＞日蔭の花でも、個性があればよい。（＃17）

『嫁—姑関係のトラウマ』主人が四国に転勤内定した。単身赴任になるかもしれない。長男はもっと自閉のようになるかもしれない。心配だ。“ふと気づいたこと”—長男もそうだが、自分が他人を批判するのを嫌うのは生前に祖母（父方）が母親を批判したり、よその母の悪口をいうことと関係があるということ。母は母でじっと忍

従していた。自分は母の“後姿”はみていたが、母との対話は記憶がない。祖母は夫（祖父）に先立たれ、祖母—息子（現夫）の結びつきが強かった。（＃18）

『忍耐するのみのクールな母イメージ』主人の転勤で子どもが動くのを嫌がっている。次男は中学卒業だが公立高校は難しい。学期の途中で入るのは難しい。＜前回の話で嫁—姑関係の間に“甘える”ことを止めていたのではないか＞母には確かに忍耐するのみで、甘えられなかった記憶がある。母が死亡したとき、泣いたのは覚えている。母の死後、お手伝いさんが入ったが、ごはんが美味しくなく、姉と交替で夕食など準備した。だからクラブ活動など入って遊びたいなあ—という思いはずっとあった。“熱中”を知らない。＜ご主人はどうか＞あの人仕事に逃げている。夜は遅く、日曜はゴロゴロしていて、信じられない。（＃19）

『親の愛情』『夫の不信』親の愛情は“無償のもの”と思う。自分の母の愛情は、ひたすら忍従し、愚痴ひとつこぼさないものであったが、自分は見習おうとは思わなかった。しかし知らず知らずのうちに無意識にとり入れているところがある。妻は夫に愛情を注ぐべきであるが、自分にはそれができなくて苦痛である。夫は毎晩のように送別会で遅くなる。夫に訴えると「40ババアが何いうか！」と一笑に付されてしまう。性生活もない。（＃20）

Ⅴ期：ある開け——淀んだ底流・空しさ停滞

この時期は、クライアント一家に色んな変化が起る。夫の単身赴任、長男の復学・登校再開、次男の高校入学である。＃21（4月8日）と＃22（4月15日）である。

『子どもの復学・夫の単身赴任』新学期から長男がやっと登校するようになった。担任がラグビー部の先生で、ちょうどよかった。夫が単身赴任して、さびしくないという嘘になるが、ひとりで生きていけるということが何となく実感できている。自分は、いままであまりに自己中心的であった。主人が居るときは、夜が遅く、しゃべる気にならなかった。子どもと3人だと食卓も早く片づく。最近は気が向いたときやればよいと思うようになった。（＃21）

『わからない空しさがつらい』《前の来談者が切迫していて時間延長し待たせてしまう》「あの方もずい分長いですね」。話はきいていけないと（廊下から）離れていた。自分の場合、“空しい気分”が漂っている。＜それはどこから起ってくるのでしょうか＞よくわからない。＜他人との関係の中で自分が定まらない？＞よくわからない。スズメのさえずりをきいても、生き生き感じられない。＜離人感か＞そういうものではない。主人とは、

父親を失い、さびしいと思ったこともあり、“見合い話”もあり、結婚した。いまは過去のことより、私の空しさ、生き甲斐のないことがつらい。＜いまの空しさをここで真剣にとり組むことが大切だ＞自分は空しさがあると、外へ行動して逃げ出してきていたように思う。（＃22）

Ⅵ期：大人であることの探究

この時期は、カウンセラーの対決によって、クライエントが自己直面し、人に頼らないこと、人に弱味を出さないこと、無駄口・陰口を叩かないことなどを言語化し自己と他者との関係をより一層明確化していく。＃23（4月22日）から＃26（5月26日）までの時期である。

『人に頼ってはダメだ——自己不信』前回帰り道で自分は人に頼ってはダメだ、ということを実感し、愕然とした。そのあとカゼ気味でもあり、一日中寝込んだ。アレルギーのせいもあり、その後2日間仕事も休んだ。自分が人を信じられないのは、自分自身が信じられていないからではないかと思う。＜どうしたらよいのかしら＞“生かされている自分”という以前いった感覚や実感が無い。宗教に帰依することも考えたが、“依存する”“ひとりよがり”になる気がする。父は母を失い、坐禅をしていた。背筋をピンと立て、“綺麗だなあー”と思ったことがある。（＃23）

『人に弱みを出すのは屈辱』《長い沈黙たびたび》やはり他人の前で自分の弱みを出すことは屈辱的な感じがすることを考えていた。＜そういうこと怖れていて本当に自分の問題を克服できるでしょうか＞《クライエントはこみ上げてくる涙をバッグからハンケチを出して拭く》＜どうしてそんなにヘッピー腰になるんでしょう＞やはり自分はうっとおしい気持ちが絶えず心の底を占めていると思う。＜それで人に非難されていると思うのではないか＞デパートで店員に注意したら、逆に怒られたことがある。（＃24）

『大人になりたい願望（大人になり切れていない自分）』自分が他人に役に立ったり、生き甲斐がないという苦しみはやはりある。大人になりたいという願望が強い。今までの自分は、30歳までは一寸したことで新しいことに気がつくとうーと喜んでいて。幼稚で、うぬぼれが強く、無鉄砲だという気がしている。大人というのはもっと中味がちがうと思う。＜ものに触れて感動するのは大人であろうとなかろうと大切ではないかしら？＞自分の実感では、それでは大人になれないと思う。いつまでも若い頃のものもちがう。（＃25）

『イヤミったらしいことという人に腹が立つ』職場のパートタイマーの人に、ものすごく腹が立ち、バットでひっぱたいてやろうと思った。姑と折り合いが悪く、追いつ

されたい。上司にはペコペコし、同僚には陰口を叩いたり、イヤミったらしいことをいう。ほんとうに虫が好かない。「もう内臓の中までジンマシンがでできそうな感じです！」家に帰宅しても腹が立っていた。これからその人は無視しよう！（＃26）

Ⅶ期：ある気づき、そして終結へ

この時期は、クライエントは自らのカウンセリングを振り返り、主人不信、母親喪失から“冷たい人間”になった自分を気づくようになる。そして“愚痴っぽい自分”、“影”と同居することで、自分本位に生きることを語っていくようになり、カウンセラーのもとを立ち去っていく時期である。＃27（6月3日）から＃28（最終回、6月10日）までである。

『ある気づき——主人不信、母親喪失による“冷たい人間”への変化』《長い沈黙 9'30"》＜いまどんな感じですか＞自分が主人との間にギクシャクしたのを感じ、甘えが出る。それを解決する為に、外にパートに出かけた。ところがデパートの店員との人間関係にかえて煩わされたり、うさんくさくなったりした。主人には「愚痴いうな！ 疲れる！」と封じ込められた。自分はもうものをいうのを諦めてしまった。自分は母親を小6時に亡くした。それ以後、“大人になり切れない”“偏屈な人間”との意識にいつもつきまわっていたように思う。主人は甘えることを嫌うので、自分は甘えるのを諦め、“冷たい人間”になった。パートの店員の息子さんが自殺した。自分も死を考えたことがあるが、主人に自分を引っ張ってほしいと思った。子どもにも“悪影響”を及ぼしているのではないかと思った。（＃27）

『愚痴っぽい自分と同居し、自分本位に生きること』「今日でおしまいにしよと思って来ました。」いままで自分が愚痴っぽいことばかり言ってきて、いいかげんに嫌になってきた。もう自分は、そういう自分と同居するしかないと思い始めた。自分でそういう自分を背負っていくしかないな—と思うようになった。“影”と同じでいつまでもつきまとうものなら、逃げないで一緒にすごそう思うようになった。それにいま“アレルギー性鼻炎”がひどくて、精神的苦痛よりも肉体的苦痛の方が大変になってきている《アレルギー性鼻炎は一昨年から始まった。》ここに通うようになって1年経ったが気分はいっこうに変わりが無い。しかし①今まで“理想”を掲げて性急になりすぎたこと、②時間をかけて取り組むこと、修復することが大切だと思うようになったこと、③“自分のためになること”から出発すること。自然に気負いなくたれて他人にも反映する、自分本位に生きることがまず大事だ。（3カ月後にフォロー・アップを約束する。）

〔フォロー・アップ面接〕（9月16日）

＜鼻炎の方はどうか＞あれから勤めているデパートの医院に毎日通い、8月末で何とか良くなった。人間関係は相変わらずであるが、あまり期待はかけないようにしている。＜ご主人や子どもさんは？＞食事はまかないつきだが、うまくないといっている。ゴルフはやらないで少し肥えたという。帰宅しても煩わしい人間関係の話はしていない、諦めている。長男は父親のところに夏休みに10日間行ってきた。四国では、自分が生活していたところがあんなちっぽけなところかと意外だった由である。次男は相変わらず、クラブや友だちと精一杯だ。＜変わったこと変わってないこと＞自分はもともと沈んだ気分だから、人に頼っても仕方がない。頼るのは自分しかない。でも気持ちが晴れ晴れとしたことはない。＜フォーカシングは＞あまりピッタリしなかった。

《印象》面接終了3カ月後も、一応自分を頼りに生活している。しかし気分は相変わらず陰うつ気分であり、軽い離人感は軽減せず、うっとおしい様子である。しかし意識の上では、“他人に頼りきり”でなく、“自分に向い合って生きている”自覚をしていることが確認された。

その翌年元旦に、手彫りの板画絵入りの賀状（図参照）が来た。Mさんのお手並みを拝見することができた。

Ⅲ 若干の考察

1. カウンセリング援助過程での諸特徴

本研究での2事例は、ともに28回の面接を約1年継続して後に、本人およびカウンセラーの意向によって終結している。この点で、事例A、事例Bの精神病理的水準である“抑うつ症”は、1年程度みっちり取り組む必要があるといえよう。しかし、以下に述べるようなカウンセラーの態度条件および治療技術の質が吟味される必要がある。

1) カウンセラーの基本的態度

カウンセラーは、すでにⅠ.でもあらかじめ言及しておいたように、基本的態度としては、クライアントが“いま・ここで”何を感じ、何を生き、何をあえていのかを共に感じつつ、伝え返していく態度である。つ

まり持ち込まれてくる話題や感情を、受容的で非断定的によく聴いていく態度であり、“母性的機能”（田畑，1984b）である。実は、このような態度そのものの中に、事例A、事例Bの“母親喪失体験”への配慮がなされている。クライアントの持ち込むどのような話題（対人的、対物的話題）に対しても、開かれた態度で接し、「ソウデスカ」「ナルホド」「エエ」「ハイハイ」などの“簡単な受容”の態度を基本に据えて接することができた。いわば井戸端会議的要素も多分にある面接も必要なのである。このような受けとめ、レシーブされる体験を通して、クライアントは、抑制し、抑うつ的になっている自己を開放し、開示していくことができると思われる。“抑うつの重荷”を心理面接の場に降ろして、身軽になっていくことができるのである。事例Aの話題では一見周回的とも思われる娘の高校受験に向けての“三者懇談”（#11）、娘の家庭教師のこと（#21）、朴葉寿子や飛び魚の竹輪の話（#26）、学内の夾竹桃の話（#28）などにも耳を傾けていった。事例Bでは息子の登校拒否の相談（#15、#16、#17）であった。

2) カウンセラーの治療技法——夢聴取とフォーカシング

抑うつ症のクライアントの基本的感情は、抑うつ的なものである。このようなクライアントに必要なことは、抑うつ的な気分から少しでも解放され、楽になることである。そして、自由な気分、楽しい気分を十分に味わうことである。クライアントのこのような気分の底にある感情は、“見捨てられた不安”であり、“甘えたい気持”“依存感情”の抑制傾向の強さであった。特に、本研究では、事例Bの場合に強かった。

事例Aでは、初回受理面接（#1）で偶然眠りに関連して、夢①「昔の友人が現われてくる。昔お付き合いしていた人の夢」が表明された。夢は、クライアントの無意識への王道であり、心理内界からのメッセージである。しかも事例Aのように、カウンセラーが夢を“共同体験的に聴取すること”は、治療技法として有効であったと思われる。現に、そのような態度で積極的に聴くことで、クライアントは、その後も夢②から、夢⑩までを連続して報告してきた。これらの夢への取り組みはとても重要であった。

ここで、夢の中にたびたび登場した“ネコ”（夢③、⑤、⑦）について考察してみよう。夢③の感情的色彩は恐怖感であり、夢⑤の色彩は気持悪さであり、夢⑦は首すじや顔のあたりをまつわりつく嫌悪感である。Kurth, H. (1976) では、ネコは「男性の夢において古来から女性の代りのシンボルとされている」（p. 286）。事例Aは夢主は女性であるが、夢に付随した気分は、不快であ



図2 M. K. からの賀状

り、追従によって欺かれ、利用されるといったことであり、Kurth の説と一致する。筆者の解釈では、夢③は対人関係（義母または店長夫人との関係）における不快感、夢⑤では対人関係（社宅での店長夫人とその周辺の人びととの関係）でのお追従や虚栄に煩わされる不快感、そして遂に夢⑦で母親（小1時の実母）との再会、である。特に夢⑦でクライアントは〈ネコのイメージ〉を小学1年時の実母の死を連想し、“肌ざわり”のフワフワを連想している。現実には、クライアントはその後義母（継母）が来て、肌ざわりのフワフワを抑圧してきていたと考えられる。他方、実母の死後、祖母と共に寝たり、この夢⑦を見た前・後頃、娘のスヌーピーの縫いぐるみを抱いて寝ており、無意識的には“肌ざわり”の体験をずっと行ってきている。

いずれにしても、これら一連のネコの夢を共体験的に傾聴することによって、クライアントの心理内界にある“依存と甘え”を意識化することができ、無意識の“接近と回避”の葛藤を意識化させることができたといえよう。具体的には、支店長夫人に象徴される不快感を意識化させえし、小学1年時の実母の喪失をすることによって義母がやってきて、依存できなくなり、甘えられなくなったことを意識化することができ、いわば“悲哀の作業”、“喪の作業”を行うことができたといえるのである。事例Aでは、このように“夢の作業”は、とても有効であったといえる。

つぎに事例Bの場合の治療技法をみてみよう。事例Bでは、依存や甘えの感情を極度に抑制し、観念的に“おとな”であろうとする度合いが極度に強かった。このクライアントは抑圧をしたものを身体症状にまで呈していた。このようなクライアントには、言語を媒介にしたカウンセリングのアプローチだけでは不十分であった。つまり感情・体験過程を極度に抑制し、思考と感情が分離しているクライアントには、“フォーカシング”（Focusing）を導入することが有効であることの好例であることが指摘されよう。

ただ Focusing #1 は、クライアントが自分のうっとおしい気分を表明した時期に導入し（Ⅰ期）、Focusing #2～Focusing #4 は、クライアントが観念的理想的自己（＝自立することを求める自己）に終始した時期（Ⅱ期）にのみ適用し、それ以降は導入していない。つまりフォーカシング技法は、心理面接のすべてのセッションに適用する必要は必ずしもないことを指摘しておく。

事例Bの治療終結後のフォロー・アップ面接で、このフォーカシング技法の効用を尋ねてみたところ、「あまりピッタリしなかった。変で不自然な感じがした」と語っ

ていた。フォーカシングを治療初期に、体験過程を促進的に行おうと導入を試みたのであるが、Ⅲ期以降の展開への口火になった程度にとどまったと考えられる。

事例Bの場合、“悲哀の作業”あるいは“喪の作業”は、事例Aほど十分明確には起りえなかった。実母の突然の交通事故による喪失、それに引き続いての“抑うつ状態”は中学時代から慢性的に持続していた。高校卒業後の会社勤め2年半、そして縁あっての現夫との“見合い結婚”、相次いで2児出産、現夫の転勤に伴うたび重なる4度の転居、さらに現夫の非協力で悩まされ続け、ついには6年前から気分転換を目指して職業婦人としてデパート店員に応募し、採用されている。しかし職場の人間関係にかえて煩わされ身体的疲労や無気力を訴え受診するに至った。カウンセリングの過程は、紆余曲折の段階をたどっていったが、生前祖母（父方）との確執にじっと忍従していた実母の“後姿”（#18）、母親と自分との間の対話や甘えのなさ（#18、#19）といった“さびしさ”“怒り・腹立ち”の表明、そして現夫への不信感や失望感の表明（#20）を経て、現夫との間に“ある開け”を体験し（#21）、クライアントは大人であることの探究＝人に頼らないこと・人に甘えて弱味を出さないこと・無駄口や陰口を叩かないことの発見をし（#23～#26）、遂には主人（夫）不信や母親喪失ショック体験から自分が“冷たい人間”に変容していたことに気づき（#27）、“愚痴っぽい自分”と同居することに気づき、自分本位に生きること（#28）を表明して自ら終結宣言して、カウンセラーのもとを立ち去っていった。このように見てくると、カウンセラーとの間でそれなりに“悲哀の作業”ないしは“喪の作業”をクライアントは行い、自己受容にたどりついていることが伺えるのである。

2. カウンセリング援助過程でのクライアントの特質

1) 初回面接来談時のクライアントの特質

事例Aは、紹介者（卒業生）に伴われて恐る恐る来室した。普段着で来室し、体格は細身で、顔立ちは細面であり、態度は礼儀正しかった。不安そうな表情で入室する。カウンセラーがソファーに腰を下ろすよう2、3度促すとうやうやく座る。新奇場面でもあり、カウンセラーとの対人関係において気遣いが多く、消極的、受身的であるという印象がした。性格的には几帳面であり、色々と負担を自分に背負い込む傾向が強い人である、との印象がした。

事例Bは、単身で来談した。身だしなみは外出用洋服で香水の臭いもプンプンさせ、体格はやはり細身で、顔立ちはある映画女優にそっくりの面長の美人であった。

しかし眼がどこか光っていて、警戒心が強い感じで、何かを鋭く見るまなざしであった。あまり身分・出所を知られたくない、との防衛的態度が強く伺えた。話しぶりに主訴のような億劫さは伺えないが、思考と感情―体験過程は分離している感じで、ストレートに訴えが伝わってこない。ぼつりぼつりと精一杯に自発的に語っていくといった印象であった。

このように両事例とも共通していえる〔病前体質・性格〕は、細身の体格で、内向的、消極的、自己抑制的性格であり、対人関係には過敏で、神経質、警戒的であることなどであった。また他人依存感情を抑制し、抑うつ的气氛に支配されており、反面で他人不信、他人非難の傾向が強く、子育てへの過度の自信のなさが伺えた。要するに“自分のもの”の欠如が共通してみられた。

2) カウンセリング場面でのクライアントの特徴

両事例ともに共通してみられた特徴を記述してみる。まず①来談時間は、両事例とも約束の時間はきちんと履行し、都合の悪いときは前の回に必ず伝達していた。②贈答行動は、無料相談の場合、成人のクライアントがよく行う配慮であるが、事例Bでは全くなかった。事例Aでは、終結時にいわさきちひろの絵の額縁を娘と相談して求めてきたとあってプレゼントした。事例Bでは、終結後の翌年の年賀状に手彫りの板画入りを差し出した。③話題の流れ、展開については、カウンセラーの場面構成（「それでは、また〇分までご一緒しましょう。どういふところからでも、いまの気持ちあたりからどうぞ…。」）をしつらえれば、両事例ともほぼ自由に語っていった。したがって心理面接場面での“安全感”“安心感”，そして“信頼感”はクライアントに体験されていたものと考えられる。④カウンセラーへの依存感情の吐露。これは事例Aでは病院の医師にも「カウンセリングをうけている」（＃12）「夢の話をきいてもらっている」こと（＃13）や医師もそうするよう奨めていること（＃13）から伺える。事例Bでは、強い依存感情は伺えなかったが、毎回きちんと来談していることから、暗々裡に依存感情を示していることが伺われる。しかしそのようなときも、事例Bは「他人に依頼心の強い（ダメな）自分を意識している」（＃3，＃5，＃14）のであった。⑤怒り・立腹の感情の吐露は、事例Bの方によくみられた。特に夫やデパートのゴマをする店員への“怒り・腹立ち”は聴いていてすこみがあつた（＃8，＃9，＃10，＃19，＃20，＃26）。

3) カウンセリング過程で浮かび上った対人関係の諸様相

両事例とも、その個人の幼児・児童期の“重要な人物”である母親を喪失したあとの対人関係について、若干整

理しておこう。

事例Aでは、小学1年時の母親喪失後、祖母がまだ存命し、“代理的母親”の役割を演じ、甘えや身体的接触を満たしていた。しかしその後父親が後妻（継母）を迎え、本人は長女として絶えず継母に気遣いをしてきていた。配慮的性格を強いられてきた。そして現夫との見合い結婚することで、夫の仕事から4回ばかり転居している。関東Y市でマイ・ホームを作り“サークル仲間”との交流が円滑に行っていたところに転勤が起つた。そして転居先では、派手な支店長夫人に付き合いの上でまいてしまった。店長や部長の住宅の棟と同じになり重荷になって、天井がまわるようになり、不眠症を発症してしまった。

発症後の家族内人間関係、特に夫や子どもとの関係は概して“協力的”であった。このことはクライアントの専門的援助（病院への通院治療、相談室への通所相談）にもスムーズに展開していった。夫は、ネコの夢に「トラ歳のおまえがネコに脅えるなんて変だな。ネズミ歳の自分の方にネコはくればよいのに！」と同情的応答で対したり、禅の修業やこころに関連した読書を妻（本人）に奨めたりしている。また娘は、スヌーピーの縫いぐるみを不安がる母親（本人）に貸し与えたりして、慰安している。このように、事例Aでは家族全員が、協力的に取り組み、クライアントの不安や重荷を側面から軽減する方向に動いていっている。そして娘が高校に入学するに際して、また入学後の娘の生活ぶりを見て、自分がかつて継母に気兼ねしたのとちがって、娘が“ズボラさ”を自然に出していることで、娘とはそういうものだということを安心して語っている。

これに反して、事例Bは、小学6年時の突然の母親喪失の後に、“自責の念”にかられ、それ以後ずっと慢性的抑うつに悩まされてきている。もともと“末っ子”で“甘えん坊”であった本人は、ずっと生き甲斐感を乞い求め、生きているってこといいなゝゝという感じに慣れ、切実であった。

本人は、母親なきあと、長姉（47歳で本人より11歳上）や次姉（年齢不明）にもあまり甘えられなく、観念的水準で“精神的に自立すること”“大人になること”を取り入れてきている。一番重要な同性同年輩の親友が欠けている。これは、中学・高校時代に、家事手伝いを強いられ、クラブやサークルにも活動する時間的精神的余裕がなかった、と本人が述懐していることから明らかである。

高校卒業後2年半の会社勤めをして、縁あって現夫と見合い結婚している。その後2児（いずれも男児）をもうけている。そして夫の仕事から4度の転居をしている。

しかし、カウンセリングの過程で試みた Focusing # 3 (# 6) で焦点づけた「井戸端会議」での感じのように、「煩しい」「うっとおしくて早く帰りたい感じ」と felt sense を表明しているように、重荷で逃避しがっている。クライアントは、近所づき合いを煩しく感じている。そして、社会進出をすることで気分一新しようと試みるが、かえってこれが裏目に出、発症している。つまり職場の人間関係のトラブルにまき込まれて、動きがとれなくなり、精神的疲労、無気力、そして無感動に陥った。

発症前・後の家族内人間関係、特に夫や子どもとの関係は、事例 A とは異って“非協力的”であり、“無理解”であった。夫は「(眠れないとき) 誰だってあるから黙って寝ておけ」とうっとおしがる (# 6)、夫は毎夜 12 時すぎに帰宅するので寝つけない (# 9)、夫自身が痛風で入院する事態になる (# 8) 夫は「(おまえも) ババアになっただなあ」「変な女にかかった」などと本気にいう (# 10)。妻 (本人) は離婚を口にしたこともあるが、夫に「短絡的だ」とたしなめられてしまう (# 10)。夫のこのような“非協力的態度”や“無理解”は、その後もずっと変化なく続いた。むしろ、夫の再びの転勤で、単身赴任をすることによって、クライアントは距離をとれるように感じ、むしろ別居生活を解放的に感じはじめた。

また子どもとの関係では、事例 A と異って、やはり“加重負担”になる問題が生じた。長男が登校拒否を発症し、援助をうけるどころか、クライアントのうっとしさを倍加させていった。幸いに次男は、カラッとした陽気で友だちも多い状態で過ごしていた。

事例 B にとって、理想の女性は、美術の世界に生きる女性 (小倉ゆき) であり、仏門に生きる女性 (瀬戸内寂聴尼) であった。世俗のしがらみを超越し、美や芸術、宗教に生きる人間と同一視していくことが、クライアントにとってもっとも心の安らぐ心境であった。しかし最終的には、自分自身の“影” (愚痴っぽい自分) と同居し、自分本位に生きるしかない心境を表明して、カウンセラーのもとを立ち去っていったのであった。

3. 少女期に母親を喪失することの内的意味

一人の人間にとって、人生の最初の出会いをし、育み、いつくしんでくれた重要な人物である“母親”を失うということは重大な衝撃である。本研究では児童期 (少女期) に病気か事故で母親を喪失した 2 事例をとり上げた。この時期に母親を失うということは、同一視の対象を失うということであり、見捨てられ体験を余儀なくされることである。取り入れられなかった母親像は、想い出としての母イメージを肯定的に作られ得ないまま、個人

(少女) の中に奥深く、抑圧されてしまい、個人は抑うつ的になる。“悲哀の作業”や“喪の作業”は不可欠である。

心理臨床の実際、あるいは予防精神衛生の観点から、これから増々ふえるであろう母親喪失に際しての“悲哀の作業”や“喪の作業”の方法論をより一層組織的に究明していく必要がある。本研究は、そのための第一歩を踏み出したにすぎない。

IV 要 約

近年、年齢的に中年ないし中高年層のクライアントが来談することが多くなっている。なかでも中年婦人の来談が特に多くなっている。これらの年代の人々は、夫婦関係の問題や性的な問題があり、心理臨床相談の重要性が指摘されよう。

ところでこのような年代層および問題群の中に、幼児・児童期に、その人たちの母親を何らかの原因 (たとえば病気や事故) で喪失した体験をもち、“悲哀の作業”を十分に行わないで、ある種の心理的障害 (= 抑うつ症) を本人自身に惹き起こし、また家族成員にも心理的問題を輻輳的に惹き起こしている事例に出くわすことがままある。これらの人びとは、いわば母親モデルを喪失し、対人関係の障害を惹き起こしている事例である。

本研究では、以上のような問題意識のもとで、筆者が自験した 2 事例のカウンセリングの特徴を報告し、若干の考察をすることが目的である。特に事例 A では、治療面接の過程でクライアントが報告した夢、とりわけネコ (動物) の夢の心理学的意味についても触れ、また事例 B では、治療面接の中に採り入れた“フォーカシング” (Focusing) の効果についても言及しようと考えた。

本研究に用いた事例 A は 39 歳で既婚女性であった。家族は夫と娘 2 人であった。彼女は小学 1 年のとき母親を病気で失っている。主訴は「神経の疲れからくる不眠を治したい」であった。治療面接は約 1 年に涉って行われ、28 回で終結した。事例 B は 38 歳で既婚女性であり、家族は夫と息子 2 人であった。彼女は小学 6 年のとき母親を交通事故で失っている。主訴は「人と話すのが億劫で気持ちがうつ状態である。生きるっていいなあーという感じがしない。」であった。治療面接は約 1 年に涉って行われ、やはり 28 回で終結した。

治療過程は、以下のとおりであった。

1. 事例 A では全部で 4 期に区分された。Ⅰ期は「自己紹介」 (# 1 ~ # 7) で夢は 6 個報告された。Ⅱ期は「楽になった自分・“喪”の作業」 (# 8 ~ # 15) で夢は 2 個報告された。Ⅲ期は「昔の友人との再会・自己統合に向けて」 (# 16 ~ # 21) で夢は 3 個報告された。そ

してⅣ期は「終結に向けての依存—独立の葛藤、そして終結」であり、夢は報告されなかった。

2. 事例Bでは全部で7期に区分された。Ⅰ期は「自分の問題表明—うっとおしい気分」(#1~#2)で、Focusing #1を行った。Ⅱ期は「自立すること・理想を追い求める」(#3~#10)でFocusing #2~#4を導入した。Ⅲ期は「諦めるという気づき・“自然のままに生きる”ということの模索」(#11~#14)、Ⅳ期は「母親なるものの探究」(#15~#20)、Ⅴ期は「ある開け—淀んだ底流・空しさの停滞」(#21~#22)、Ⅳ期は「大人であることの探究」(#23~#26)、そしてⅦ期は「ある気づき、そして終結へ」(#27~#28)であった。

以上の治療過程にもとづき、つぎのような考察を行った。

1. カウンセリング援助過程の諸特徴
 - 1) カウンセラーの基本的態度
 - 2) カウンセラーの治療技法——夢聴取とフォーカシング
2. カウンセリング援助過程でのクライアントの特質
 - 1) 初回面接来談時のクライアントの特質
 - 2) カウンセリング場面でのクライアントの特徴
 - 3) カウンセリング過程で浮かび上った対人関係の諸様相
3. 少女期に母親を喪失することの内的意味——予防精神衛生的観点での指摘。

文 献

Gendlin, E. T. 1978, 1981 *Focusing*. Everest (邦訳: ユージン・ジェンドリン著 村山正治・都留春

夫・村瀬孝雄共訳 1982 フォーカシング 福村出版)

池田由子 1985 妻が危ない——主婦の精神衛生相談。弘文堂

Kurth, H. (ed.) 1976 *Lexikon der Traumsymbole*. Ariston Verlag. (邦訳: ハンス・クルト編 池田芳一他共訳 1978 夢事典 自由都市社 Pp. 286-287.)

小此木啓吾 1979 対象喪失 中公新書

田畑 治 1976 成人女性のカウンセリングの方法論的検討——問題の所在と事例的探索——日本心理学会第40回大会発表論文集(中京大学). Pp. 1091-1092.

田畑 治 1977 成人の援助機能(田畑 治・村山正治編 来談者中心療法——講座心理療法Ⅰ—— 福村出版 Pp. 121-125.)

田畑 治 1983 a 児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴. 日本教育心理学会第25回総会発表論文集(熊本大学). Pp. 830-831.

田畑 治 1983 b フォーカシングを適用した仮面うつ病婦人の心理治療過程. 日本心理学会第47回大会発表論文集(早稲田大学). P. 742.

田畑 治 1984 a 心理治療過程に現れた治療者像とその機能(Ⅱ)——母性喪失体験をもつ男性・女性クライアントの夢分析を通して——. 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——. 第31巻, 1-23.

田畑 治 1984 b 治療の中での父性機能—カウンセリング. 季刊精神療法, 第10巻(第2号), 130-133.

米倉五郎・成田善弘 1983 母親の死後に身体症状を呈した男児の治療経験——箱庭にみられる mourning work. 第11回日本心身医学会中部地方会(愛知教育大学)(口頭発表)

(1985年8月5日 受稿)

ABSTRACT

SOME CHARACTERISTICS OF COUNSELING WITH THE MIDDLE-AGE-WOMEN WHO HAVE LOST THEIR MOTHERS IN CHILDHOOD

Osamu TABATA

In recent years, the clients who are middle or upper-middle ages come to seek for counseling. Especially the middle-aged women are more frequent to require for counseling. These people have the problems such as couples or

sexual disturbances. Therefore, it will be pointed out that the psychological-clinical counseling becomes more necessary.

By the way, it is often encountered by the counselor that these clients have lost their mothers by some reasons (i.e. illness or accident) at early infantile age or childhood, and unsolving the "mourning work" or "grief work", fell in a certain psychological disorders (for example, depression), and moreover has caused a problem in their family members convergently. These cases are the clients who have lost a mother model and fell in interpersonal disturbances.

The purpose of this paper is, under these problem-consciousness as mentioned above, to report some characteristics of the two cases, and to discuss on some points arisen in the counseling processes. The author refers to the meaning of dreams, especially the psychological meaning of "the cats" reported by the client 'A', and by the client 'B', the effectiveness of "Focusing" (E.T. Gendlin) adapted in the psychotherapeutic processes.

The Case 'A' used in this study was a married woman of 39 years old. The family was consisted of her husband and two daughters. She has lost her mother on account of illness at the 1st grade of primary school. The complaint was to "cure insomnia due to neurological fatigue". The therapeutic interviews were continued for one year, and terminated at 28 sessions. The Case 'B' was also a married woman of 38 years old. The family was consisted of her husband and two sons. She has lost her mother on account of unexpected traffic accident at the 6th grade of primary school. The complaints were the "escape from depressive state raised by interpersonal trouble", and to "be released from the lost feeling of well-being". The therapeutic interviews were continued for one years, and terminated at 28 sessions.

I. The therapeutic processes of the both cases were as follows:

1. The processes of the Case 'A' was divided into 4 stages. The Stage I was "Self-introduction" (#1 ~ #7), and the dreams were reported six. The Stage II was "Relaxed self and Mourning work" (#8 ~ #15), and the dreams were reported two. The Stage III was "Re-encounter with an old friend and Start to self-integration" (#16 ~ #21), and the dreams were reported three. And the Stage IV was "Conflict with dependence vs. independence toward termination, and Final termination" (#22 ~ #28). Dream was reported none.

2. The process of Case 'B' was divided into 7 stages in all. The Stage I was "Expression of own problem - depressive mood" (#1 ~ #2), and administered "Focusing" #1. The Stage II was "Self-establishment and Seeking for an Ideal" (#3 ~ #10) and adapted "Focusing" from #2 to #4. The Stage III was "Awareness of resignation, and Exploration of being naturally" (#11 ~ #14); The Stage IV being "Exploration of Maternity" (#15 ~ #20), the Stage V being "An Unfolding - Stagnated undercurrent and Stagnation of empty mood" (#21 ~ #22), the Stage VI being "Exploration of being Adult" (#23 ~ #26), and the last Stage VII was "An Awareness of Self, and Termination" (#27 ~ #28).

II. Concerning to these psychotherapeutic processes, the following discussions were done:

1. Characteristics of the counseling processes.
 - 1) Basic attitude of the counselor.
 - 2) The therapeutic techniques - dream-listening and "Focusing".
2. Characteristics of clients during the counseling processes.
 - 1) Characteristics of clients at the initial intake interviews.
 - 2) Characteristics of clients during counseling situations.
 - 3) Aspects of interpersonal relationships which were disclosed during counseling processes.
3. The psychological meaning of losing mothers at their childhood - From view point of preventive mental health.